



TITLE:

性のオリエンタリズム——インド の性幻想とその解釈をめぐって

AUTHOR(S):

田中, 雅一

CITATION:

田中, 雅一. 性のオリエンタリズム——インドの性幻想とその解釈をめぐって. 1993: 340-360

ISSUE DATE:

1993

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87419>

RIGHT:

c Jinbun Shoin 1993, Printed in Japan.

性のオリエンタリズム

——インドの性幻想とその解釈をめぐる

田 中 雅 一

一 異文化のセクシュアリティ研究への視座

民族誌記述における主要な問題点として、個人的な視点の欠如と、それと表裏一体の関係にある過度の体系的あるいは整合的な記述が指摘できる。⁽¹⁾ 類似の問題が異文化のセクシュアリティ（性）研究にも認められる。神話や儀礼、日常生活において支配的な言説の分析といった人類学のセクシュアリティ研究の常套手段からは、過度の体系化による一元的なセクシュアリティ理解に終始し、結果的に、異文化のセクシュアリティ研究に求められている〈性Ⅱ生〉の多様性を呈示することはできない。人類学におけるセクシュアリティ研究に欠けているのは、ミクロな視点、複眼の視点である。

本論では、以上の問題意識に基づいてボンベイで精神分析の治療を受けた患者たちの記録をもとに、インドのセクシュアリティの考察を行う。個人の生み出す性幻想や夢とセクシュアリティの文化的な表象とのからみを明らかにし、そこからさらにインドの性幻想をめぐる従来の精神分析的解釈に批判的な検討を試みることで、異文化のセクシュアリティ研究の問題点を指摘したい。

二 無限大の乳房、等身大の陽根（ファルス）

精神分析は、インドにおいてはかなりはやく、一九二〇年ころにはすでに紹介されていた。しかし、精神科医と区別される厳密な意味での精神分析家は、今日でもせいぜい三〇人あまりで、大半がカルカッタやボンベイなどの大都市にいるにすぎない。⁽²⁾ボンベイでは患者たちはかならずしも裕福な人々ではなく、さまざまな階層に属する。診察料も患者の経済力に見合ったものを要求している。⁽³⁾患者たちは原則として月曜から金曜まで毎日通院する。使用言語は主として英語であるが、一部の患者にはグジャラーティ語かヒンディー語が使用される。

以下は一九九一年の七月にボンベイで会うことのできた精神分析家の一人から得た記録である。患者と筆者とは直接面識はない。また、実際の治療の場面に参加する機会がなかったという点で、資料にたいして分析家による加工もなされているかもしれない。しかし、上述した本論の目的には、十分かなうものと判断した。なお本論の主題との関係で、セクシュアリティをめぐる問題が明白なものだけを考察の対象としていることをこわつておく。

ケース 1

マハラーシュトラ州出身でボンベイに住むブラーマン男性 A。年齢は三八で、生命保険会社で働く。分析を始めてから一年後の三九歳のときに娘が、そして二年後の四一歳のときに息子ができた。かれの悩みは自由に移動することができないことである。いつのころからか分らないが、見知らぬ土地に行こうとすると言い様の

ない不安に襲われる。かれは文字通り自宅と会社を往復するだけの毎日をおくっている。一度昇進の話があったが、ボンベイを離れなければならなかったで、これをことわった。不安に襲われてから精神分析家を訪ね、そのクリニックがかれの行動範囲につけ加わった。精神分析家は、かれの悩みを性的な固着と結びつけて解釈した。事実かれには乳房への異常な執着が認められた。

Aはマハラシシュトラ州の田舎に育った。大家族で、両親だけでなく、父の兄弟やその家族たちも住んでいた。かれは叔母たちの胸に触ったり、また腕を激しく前後に動かしてもらってブラウスの下で揺れる乳房の動きを見ると、性的な興奮を感じた。夜になると叔母たちの横に寝て、彼女たちの胸に触っていた。そのときかれは自分を幼児の頃のクリシュナ神のように感じたという。ただし、かれは母の乳房には絶対に触れようとはしなかった。こういった乳房へのこだわりが五歳の頃から九歳のときまで続いた。九歳になってからAは両親とともに田舎を離れボンベイに住むことになった。こうして叔母たちとの密かな楽しみも途絶えることになる。その代わり、かれは通学、通勤時のバスの中で女性の胸に触り始めた。

精神分析家の所に通うようになってから見た夢のひとつは、バスでの痴漢行為と結びついたものであった。かれがいつものようにバスに乗ると、その車掌は当時の首相インディラ・ガンディーであった。彼女は切符切りを持ってかれに近づくと、それでかれの手に穴を開けたのである。そのときかれは殺されたと思って気を失い、その恐怖で目覚めた。

ここに認められるのは自分の欲望の対象となった女性への潜在的な恐怖といえよう。かれは、就寝時に乳房を触っていた叔母たちが、怪獣となってかれを飲み込もうとする夢も見ている。

もうひとつの夢でもAの乳房への執着が認められる。かれはある時眼下にずっとひろがる海原を見ていた。すると、海底に町が見える。かれは引き込まれるようにして海中に入り、薄暗い海底に横たわる町に向かった。奇

妙なことにそこにはひとつ一人いなかったが、遠くに赤いネオンサインがついたり消えたりしているのが見えた。何だろうと思つてそちらの方に近づいていくと、無限大の記号(∞)を表わすネオンであつた。かれの夢はここで途絶える。

Aはこれを無限大で表わされるような宗教的なものへの導きの夢と解釈している。しかし、無限大の記号は乳房の形象でもある。

この夢との連想でかれは、宗教的な事柄についても話を始めた。それは少年時代に住んでいた村に住み着いた一人の聖者であつた。聖者は大樹の下に住んでいたが、その樹のもとを離れず、村人と交わることはなかつた。かれは村人から食事を受けることを拒否していた。同じようにAもまた、人との交わりを極度に制限していた。その制限の仕方は、空間移動の問題にとどまらず、身体との関係にも現れていた。たとえば、かれは小さいころに天然痘の予防接種を拒否している。予防接種に限らず、なにか異物と思われるものが体にはいると、毒となつて死んでしまうと思うからだ。

他者への依存を避けて、村の聖者のように自立して生きたい。自分が依存せねばならない存在にたいしては、その依存観ゆえに敵意を抱く。母との関係や妻との関係には常にこうした敵意がまわりついていた。これと関連してかれが見た夢に、赤ん坊が母をその乳房に吸いついたまま殺してしまうというものがある。

Aの自立しようとする意志に反して、かれの行動や強迫観念はまさに幼児のものであると解釈できよう。かれは安全と思われる場所以外には足を伸ばそうとしない。妻は対等の人間というよりは、かれの欲求を満足させる子宮的存在でしかない。かれの性欲を満たし、食事を供給し、そして家事に専念すること、これがかれにとつての妻である。かれは外で食事をしようとはしない。また衣服も白いものしか着ない。衣食ともにきわめて限定したものの、いつも食べ慣れた、着慣れたものしか受けつけないのである。

幼児としてのAは当然ながら自分に子どもができるという思いを拒否してきた。乳房に吸いついたまま母親を殺してしまう赤ん坊についての夢は、生まれでてくる赤ん坊への恐怖、幼児である自分の居場所を取り去ることになる赤ん坊への恐怖を表わしているとも解釈できよう。ある夢では、会社で子どもが生まれたという電報を受け取るが、机の引出しを何気なく開けると、すでに死んだ胎児がそこに入っており、Aは最大級の恐怖を体験する。

だが、Aの幼児性をもっともよく表わしているのは何よりも乳房への固着であろう。すでに述べたように、これは乳房に異常な興奮を覚え、叔母やバスの通勤客の胸を触ることでその欲望を満たしてきた。かれが自慰をするときに好んで思い描く場面は、大きな乳房をもつ女性たちである。また村の女たちはお金をしばしばブラウスでおおわれた胸の谷間に入れておくが、かれは彼女たちがそこからお金をとるしぐさ、そのときの胸の動きを思い描いて自慰にふけた。Aは幼児となって、つぎからつぎへと乳房を渡り歩いていく、そのような幻想を抱きながら性的興奮を得るのである。ただし、そこで性的対象となる女性たちは、けっしてかれのいいなりになる存在ではない。かれは一方で、性の快楽を与え自分を保護してくれる女性に飲み込まれ、死に追いやられるという恐怖を感じている。叔母たちは怪獣に変身し、バスの中でかれはインディラ・ガンディーによつて去勢されてしまう。

Aは自分をクリシュナ神にしばしばなぞらえていた。クリシュナはさまざまな顔を持つ、インドにおいてはもっとも人気のある神である。クリシュナ神はヴィシュヌ神の化身のひとつとされ、『ラーマーヤナ』とならんでインドの二大叙事詩のひとつとされている『マハーバータ』で活躍する神である。しかし、もっとポピュラーなのは幼児として描かれるクリシュナである。Aが、自分をクリシュナになぞらえる理由もそこにある。そしてこのような意識が、かれの不安を和らげているということもできよう。

しかし、よくよく突き合わせてみると、夢の中や性的な幻想におけるかれの振舞いは、クリシュナのものとはおおいに異なる。クリシュナは自分を育ててくれた養母に口を開いて全宇宙を開示する。かれは宇宙そのものを体現しているが、Aは反対に乳房への固着に象徴されるように、自分の生活世界を極度に限定している。神話の中でクリシュナはかれを殺そうとする妖女、プータナーの乳を吸う。彼女の乳頭には毒が塗られている。だがクリシュナは毒殺されなかったばかりか、反対に乳房に吸いついたまま離れず、命まで吸い取って殺してしまう。しかしAの場合、殺されるのは妖女ではなく実母である。

精神分析家との対話を通じて、かれは乳房への固着と、幼児性や空間移動の困難さとの関係を意識するようになり、分析を始めて三年目、二人目の子どもができるころには不安は解消していた。

ケース2

患者Bは二四歳の男性で、ウツタルブラデーシュ州出身のブラーマン。仕事は事務職である。

Bはアメリカで研究者になろうとしたが、未知の世界を対象とする研究職には適さず、結局挫折して母国に帰ってきた。かれはすでに知られていることについて話をすることはできたが、未知の世界、不確かな世界が存在し、これに対峙するということには耐えられなかったという。帰国してから落ち込んで精神分析家の門を叩いた。ケース1の男性と同じく、Bは生活に曖昧な領域が侵入してくることを極度に恐れていた。その日常生活はつねに同じことの繰り返しであった。夕食は七時、七時四五分には散歩に出かけ、九時に就寝する。土曜日の午後には本屋に出かけ、日曜日は家でぶらぶらしている。このため夕食に招待されたり、反対に自分の家に人を招待することを極力避けた。

Bは一人息子で、上に五人の姉がいた。息子が娘より望まれるインド社会の一般的傾向を考慮すると、かれは

両親、とくに母親にとって待ちに待った子どもであった。かれはクリシュナとならんで人気のある神、ラーマと呼ばれてかわいがられた。母に溺愛され、姉たちにはかれを敬うことが暗に要請された。かれは自分のせいで、姉たちを不当に苦しめたという罪の意識を抱いていた。「男だということだけで、可愛がられたり敬われたりするに価することだろうか」とかれは自問した。そして、姉たちに自分を敬うように強いている母を憎んだ。姉たちに示した理解にもかかわらず、かれの女性観は母にたいする憎しみを核として形成された。あるときかれは、自分の家でボイラーが爆発して女たちがすべて火傷に苦しみながら死んでしまうが、男たちは生き残るという夢を見る。

Bはのちにこの母親の溺愛に支配の関係から脱出しようとして、母が反対する女性と結婚し、さらに母との同居を拒んで、海外での学究生活に入ることを決心したのである。しかし、すでに述べたように、研究者として生活しようとしたかれの試みは失敗に終わる。帰国してからかれはある会社を務めていたがうまくいかず、結局父の仕事を手伝うことになる。こうして、母からの独立は成功しなかった。それだけでなく妻との関係も暗礁にのりあげていた。

母の意見を無視して妻を自分の意志で選択したBにとって、妻は母と反対の従順な女性であるはずであった。しかしながらあるとき妻から一日に四回でも五回でもセックスをしたいと聞かされ、Bはシヨックを受ける。妻はたんに誇張して言ったにすぎないと思われることを、かれは文字通り受けとめ、妻に裏切られたという感情を抱く。彼女もまた母と同じように欲深く、自分からすべてを奪いさうとしていると感じたのである。このシヨックから立ち直るべく、妻は自分の貴重なペニスを専有するに価しない安っぽい女だとかれは判断する。妻は欲深いだけでなく、男の体の仕組みについて何も知らない無知な女なのである。Bは妻を無知だと考えることで、なんとか妻の恐怖から身を守ることができた。

Bが女性について抱いているイメージを端的に示す夢に次のようなものがある。それは海原にひとつだけサツカーのゴールが立っているというものである。分析家の解釈では、ゴールは際限なく波を飲み込む欲深き女性を表していたが、筆者には、際限なく押し寄せる波にもまれるゴールこそ、妻の果てしない欲望の対象となつて、孤独と不安にさいなまれる彼自身を表現していると思われた。

ケース1とケース2の男性に共通して現れているのは、母親に代表される女性への不安である。つぎに取り上げるのは女性の場合である。

ケース3

都会的センスを身につけた魅力的な女子大生C。英文学を専攻する。グジャラート州の商人カーストで、父は繊維工場を経営する。彼女は自分が分解して崩れてしまうような不安に襲われて、精神分析を受けるようになった。

母と息子との関係に対応する形で、このケースでは父と娘との関係が不安の原因として指摘されている。娘は父親が自分の仕草や着ているものを好まないと思ひこんでいる。娘は昔と同じように父親に触られたいが、父親はこれを拒否している。こうした父親の態度は彼女のセクシュアリティと関係しているという事に薄々気づいてはいるが、幼児期の記憶に残る父親との関係から離れて、ほかの男性と（性的な）関係をもつことに躊躇している。

Cには当時ボーイフレンドがいた。彼女はかれを好きだったが、セックスができとは思わなかった。なぜなら彼女のヴァギナが開いてかれを受け入れようとしなからだ。好きな男と寝たいのに寝ることができない。彼女の体はこわばり、心は閉ざされてしまうのである。そのころしばしば見た夢は、寝室の窓から何かがやってき

て寝ている彼女を犯すというものであった。男を迎えるのを拒否するヴァギナは暴力を通じてしか男を受け入れない。彼女にとって性と暴力とは分かち難く結びついていて、自分の性的な欲望を表現することができなかった。しかし、暴力的な性を否定しようとする、自分が崩れていくという不安に襲われる。実際に自分の性器を爪やガラスで傷つけることもあった。

Cは大学卒業後働きはじめ、何人かの男性とつきあうが、性関係に満足することはできなかった。しかし、徐々に、父、暴力および性とのもつれが解けることで、不安が消えていった。二年半分析を受け、現在合衆国に留学中である。

ケース4

上流家庭に育った二〇代半ば、大卒、女性ジャーナリストD。ラジャスタン州の商人カースト出身。父は工場を経営する。七人の子どものうち彼女は五番目である。上には三人の姉と一人の兄、下には弟と妹が一人ずついる。彼女は強圧的な父を憎み、また妹を溺愛する母も嫌っていた。家の中で彼女はみんなに拒否されているという感情をもっている。一人でいると常に不安を感じるが、他者に愛情をもつて接することができない。性関係から満足を得ることができない。長い間つきあっている男性と性関係をもつことに不安がある。性関係はつねに受動的で、欲びを感じることはいない。

だからといってDはセックスを完全に拒否しているのではない。実際に交わる代わりに、恋人のペニスを切りとりそれをヴァギナの中に入れておきたいことを夢想して興奮する。

Dは毎晩寝る前に自慰をする。自慰からしか性的な欲求が満たされないと云った方がいいかも知れない。しかし、その仕方は彼女の不安をある程度示唆しているかに見える。すなわちDはタオルを性器にあててその上から

直接性器には触れないで自慰をする。そのとき夢想するのは、自分が娼婦かストリップショウの踊り子となつて多くの男性に見られている場面である。自分が複数の男たちの性欲の対象となつていることを意識しながら自慰をする。直接的なセックスを夢想する場合は、性器がガラスの破片で傷つけられるというように暴力をとまなう。そこには相互理解を前提とするような性関係は欠如している。彼女は、眼差しや暴力の対象としてしか、すなわち想像上の男性の視点からしか自分のセクシュアリティを見ることはできないのである。

分析を受け始めてからDが見た夢の一つも類似の性格を示している。すなわち、ここでは分析家自身がカメラマンとして登場する。そして彼女を被写体として写真をとる。しかし彼女はここでは性的な対象としての女性ではなく、007映画の主人公ジェームズ・ボンドである。いわばジェームズ・ボンドは、他者の視線から彼女のセクシュアリティを保護する存在と言えよう。

同じような夢として、彼女は死んだようにじっと動かないという夢を何度か見る。これは他の存在、とくに男性との性的な関係を拒否しようとする意味合いがあると、精神分析家は解釈している。死ねば他人と交わる必要はない。死が彼女の人生の問題をすべて解決するというのだ。実際彼女の言動を見ると、話し方は単調で、動きはぎこちない。死者のように振舞うことで、彼女は実生活において他者の侵入を回避し、自己の安全を保つているといえる。

分析家はDと恋人との冷たい関係を父との葛藤に結びつけている。彼女は五年間の分析の間に、新しい恋人ができ、うまくいくようになった。その後結婚して子どもができています。

ケース5

二〇代のイスラーム教徒の女性E。父は食用油を売る会社に務めている。彼女自身は大学卒業後株式市場で働

く。両親と弟の四大家族。常に孤独を感じ、ないがしろにされていると思っている。だれも彼女のことを気にかけてはいない。Eは家族のものも含めてみんな自分の所にきて、話しかけるべきだと思う。そうしないのは彼女を愛していないからだ。

Eの父は母に暴力をふるい、家庭での言い争いや喧嘩は絶えなかった。株式市場での彼女の仕事は電話を通じての売買の指示を受けるだけで、仕事を通じて親密な人間関係を築くことはできない。彼女はどんな男とも親しい関係にはいることを恐れ、結婚できるとは思っていなかった。チャーチゲート駅にあるガラス絵を見るたびに、ガラス絵が反転するという錯覚に陥る。あの絵の裏側には子どものころに戻ることでできる道があるはずだと、確信している。彼女はすべてに自信がもてず、危うい。彼女にとっては今の自分よりも、子ども時代の自分の方がより確かな存在なのだ。

ここではEがイスラーム教徒であるということに着目してみよう。ある夢で彼女はイスラーム教徒とヒンドゥー教徒の暴動にぶつかる。彼女はそこで自分の考えをはっきり示さなければならぬ。ヒンドゥー教徒側につくか、それとも暴動に反対を唱えるか。奇妙なことに彼女にはイスラーム教徒の側につこうという選択肢が最初から欠如している。自分が期待されていることを受け入れようとはしないのである。

もうひとつの夢では、Eは寝室の窓から外を見ている。あたりが騒がしくなり、あちこちで火の手が上がる。暴動が発生したのは明らかである。しかし、彼女は明日の新聞を見れば暴動かどうかはつきりするだろうと考えて窓を閉める。彼女はいまここで生じていることがら、自分が半ば当事者として経験していることが信じられない。自分の体験よりも新聞の解説のほうがより信頼できるのである。

これらの夢から理解できるのは、Eはボンベイの生活に適応しているかに見えて、いつ生じるか分からない暴動への不安を心に抱いているということである。しかしこの不安は自分がイスラーム教徒という少数派として暴

力の犠牲になるという不安を指すだけではない。そのようなときに自分が現実を理解し、期待されるべき決断をきちんとすることができるとかという不安でもある。Eが感じる孤独感、非現実感というものはたんに家族関係から説明されるものではなく、イスラーム教徒という少数派に彼女が属しているという社会的状況への不安をも表明しているといえよう。

Eがみずから積極的に振舞い、心から欲びを感じるのは自慰に専念するときである。どちらかというと女性的な魅力にかけていて男性との関係にまったく自信のないEが、積極的に振舞うことができるのは自慰の幻想においてだけである。シャワーの水で局部を刺激しながら彼女は、何人もの男たちとセックスを楽しむ自分を夢想する。彼女は男たちのペニスをくわえ、なめる。そうするとペニスはどんどん膨張して、彼女の体を口から貫き、体全体を内部から押し広げていく。等身大となった陽根は、自分の外部にあると同時に内部にある。それに吸いついている自分を夢想するとき、彼女は、現実の男の場合と異なり、男が心から愛しく、普通の性行為を夢想するときよりも強く欲びを感じる。Eにとつてペニスをくわえるということは、男性との関係で唯一の積極的な行為であり、そこに欲びを感じる。

以上いくつか事例をあげて、ボンベイに住むインド人たちのセクシュアリティとそれにまつわる不安を紹介してきた。これらの事例はかならずしも典型的なものとはいえない。にもかかわらず、先行の研究から、こうした事例に認められる特徴がインドの他の地域から報告されているものと共通するというのも事実である。この点を次で検討したい。

三 原風景としての母性

われわれはAやBのケースから、両義的な女性観を認めることができよう。それは多くの研究者が、ヒンドゥー教徒一般に認められる性向として指摘しているものである。その論旨は微妙に異なるが、ここではとくにカールの分析を中心に考察を進めたい。⁽⁵⁾

ヒンドゥー社会の特徴としてまず指摘されるのは、母と息子との過剰ともいえる親密な関係である。その過度な親密さは、インドの男性中心の伝統的な社会組織と密接に関係している。女性は若くして結婚し、生家を遠く離れて見ず知らずの夫のもとへと嫁いでいく。そこで若い花嫁に与えられるのは、拡大家族の中でのよそ者という身分である。彼女は結婚後義理の母の厳しい監督のもとで新しい生活をはじめ。インドでの嫁と姑との関係は姑が圧倒的に強い。頼みの夫は妻に愛着を抱いていても、大っぴらに母にたてついて妻に味方するということはない。

妻の孤独が和らぐのは、彼女が懐妊し、子どもが生まれたときである。彼女は生まれてきた子ども、とくに息子を溺愛する。息子は、彼女の欲望を十分に満たさず、愛に応えてくれない夫の身代りである。こうして母と息子との間には密接な関係が生まれる。しかし、息子は、妻が夫にたいして抱く怒りや不満のはけ口でもある。かくして、息子は母を、一方で慈悲深い存在と感ずるが、他方で母は、自分の自立を拒み、応じることの不可能な要求をつきつけてくる恐怖の対象となる。否定的な母のイメージが女性一般の見方に影響を与え、男性は相互理解に基づく結婚生活を確立することはできない。その結果妻は息子を溺愛する。以上の悪循環がインド社会に存

在するというのが、カーカルの基本的な考えである。

本論の事例は、インドの伝統的な人生をおくる人びとを取り上げているわけではないが、にもかかわらずこれらの育った環境や価値は上述した親子関係に根ざしたものと似かよっていると判断できる。むしろ伝統的価値観と都会のライフスタイルとのずれが、かれらに不安を引き起こしているのである。

本論の事例にもどると、Aの不安は女性の代表としての母にたいする両義的な関係に根ざしているといつてもよからう。かれは母から自立しようとするが、それができない。女性は欲望の対象であるが、しかし、同時に恐怖の対象でもある。生活を営むうえでの曖昧さ、不確定性を排し自己の生活を律しようとするほどかれは自由を失い幼児化してしまう。乳房は、海面下での無限大の記号に表されるように、母性の圧倒的な強さを暗示している。

類似の解釈はBの場合にも妥当しよう。母の溺愛を一身に受けた結果、姉たちにたいする罪惡観がかれに生まれる。これは同時に母の愛にたいする恐怖をも意味する。同じことは妻にたいするかれの態度にも現れている。

かれは自分を取り囲む女たちの限らない愛と欲望に恐怖すると同時に、その愛に応えることのできない自身の無力さを転化して、母や妻を憎悪する。大洋に頼りなげに立っているサッカーのゴールは、かれの不安を適切に表わしている。同じ海がかれを包み込む慈悲深い母でもあるはずだ。かれもまた母からの自立を希求するが、成功しない。

ここで注目すべきことは、男性が抱く否定的な女性のイメージが、女性患者たちの性幻想においても共有されていることである。Cは男を拒否するが、ペニスだけを切りとってヴァギナに収容しておきたいと述べる。またEは巨大なペニスを飲み込むことを夢想する。

女性の場合、男性のように母との密接な関係を形成するのではないが、にもかかわらず彼女は結婚でよその家

に嫁ぐまでの間、生家で可愛がられる⁽⁶⁾。それはしかし母が息子にたいして示すようなエロティックなものではない。娘はむしろ結婚までのあいだ大事に育てなければならぬ小さな客人とみなされている。

こうした関係は娘のセクシュアリティの発現によって急激に変化していく。事例からも分かるように、女性の場合セクシュアリティの発現をめぐる不安が主要なテーマとなっている。それは部屋に忍び込む黒い影や、男たちの視線として表現されている。他方で急によそよしくなった父、または暴力的な父との関係が男性との「正常」な関係を妨げ、幼児期への逃避願望が強く働く。男たちの視線から身を守るためには、Dの場合のように死＝客体化によるほかはない。

さらに重要な主題として認められるのは性と暴力との結びつきである。自虐的な暴力をとまなう性幻想は、性的な領域での現実からの逃避の手段とみなすことができる⁽⁷⁾。この幻想は正常な男女関係の拒否あるいは不感症と結びついている。河野貴代美は不感症を、まず男性優位社会での代理戦争であると指摘し、女性はいくつもの男性を拒んでいると述べている⁽⁸⁾。また不感症は同時に強圧的な母との代理戦争でもあるという。この場合、男は母の代理である。そして女は満たされなかった母の愛を男に求め、男がその要求に応じないために不感症という形で応酬するというのである。このふたつの解釈は二者択一的なものではあるまい。本論で取りあげた事例ではどちらの解釈も妥当するように思われる。とくに後者の説に従うならば、父だけでなく母もまた娘のセクシュアリティの形成に大きな影響を与えていると言えよう。

以上のまとめのほかに指摘できるのは神話への言及である。インド人にとって神話は自己の不安や幻想を表わす手段としてきわめて重要な役割を果たしている。ローランドはこうした傾向を「神話的志向 (mythic orientation)」と述べている⁽⁹⁾。

四 豊かな「性」生活の記述への試み

以下ではいままでの議論にたいする留意点を示しておきたいと思う。それは、本論で援用してきたインドの親子関係の特殊性を強調する解釈枠組は、たしかにわれわれの理解を深めるものであり、また実際の治療過程においても強調されるものと思われるが、それによってわれわれは社会的な次元にとどまらず、心理的次元をも含むより強固なインド的なセクシュアリティのステレオタイプを呈示しているのではないかという危惧である。人類学が克服すべきセクシュアリティ研究の問題は、たんに精神分析学に接近することで解決されるわけではかならずしもない。

母との幼児的な関係を断ち切れず、自立できない存在というのは、インドに限らず日本などを含むアジア世界について繰り返し述べてきた否定的な言説ではないのか。かつてインドは保護を必要とする弱い性、すなわち女性にたとえられ、また男性たちも本質的に「女性的」で自立ができず、非合理的存在とみなされていた。こうしたオリエンタリズムの言説が植民地時代には英国支配の正当化に一役かっていたことは疑い得ない。⁽¹⁰⁾ 本論では精神分析のような性の言説を規定し、生産する領域に認められるオリエンタリズムをとくに「性のオリエンタリズム」と呼ぶことにする。

さらに自虐性や不感症という概念自体が患者のセクシュアリティを理解するために使用されるというより、反対に男性に従属する女性一般のセクシュアリティを規定するために使用されるという傾向も無視するわけにはいくまい。⁽¹¹⁾ 女性は本質的に自虐的であるとされ、男の誘惑に応じて快楽を共有できるもののみが男社会の従属的な

一員として認められることになる。不感症の女は、男性中心の特権的な社会から排除される。インドが女性であるという等式が成り立つなら、そこからインド人たちが自虐的でそのうえ不感症であるという見方が導き出されても不思議ではあるまい。

また神話的世界との結びつきも、たしかに否定できない事実であるが、それを強調しすぎると、神秘的で非合理が支配するというおなじみのインド観を呈示するにとどまるであろう。Aの場合、かれはみずからをクリシュナにたとえているが、その行動や幻想はクリシュナの活躍する神話と同じではない。

ダースはインド人男性のもつ両性具有的なアイデンティティを、たんに女性的なものとするべきではなく、より積極的なものをそこに認めるように示唆している⁽¹²⁾。同じような視点の転換を、本論で取りあげた資料にも求めることはできないだろうか。つまり幻想を幼児的な欲望の産物あるいは現実からの逃避手段としてみるだけでなく、人格形成においてより積極的な意味をもたせるような解釈の転換である。

ここで取りあげた患者に共通して認められることは、現実感覚が喪失していたり、そこに曖昧さが入るのを極端に恐れているということである。その曖昧さの最たるものは、かれらの肉体、そのセクシュアリティにある。ただし、不安の根源としての患者たちの身体と欲望は、疎外関係にある世界と自己とを救済する幻想的な力の源泉でもあることを忘れてはならない。Aの男性にとつては自分の欲望の対象であると同時に恐怖の源泉でもある無限大の〈乳房Ⅱ母〉は、現実世界の曖昧さ、不確かさからくる不安を克服する唯一の存在でもある。それは、海底の町にたとえられる限られた生活空間からかれを外に誘いだしてくれる数少ない誘発因子である。

同じように、Eの場合、性幻想に積極的な意味を有するものとして現れるのは等身大の陽根である。だがそれは、たんなる欲望の対象でも、女性のセクシュアリティと対峙し、従属を強いるような超越的な陽根でもない。それは彼女の口腔内で慈しみをもって育てられ、創造される陽根なのだ。そしてその創造こそ欲びであり、その

歓びの中で精神的、肉体的な境界は崩れさり、不安が解消される。Eはそそり立つ陽根と同一化する（くわえこむ）ことで、初めて脆弱な自我を克服し、この不透明な現実に対峙することができるのである。

本論では〈性Ⅱ生〉の多元性を損なわずに、ミクロな次元からセクシュアリティを記述することの必要性を強調して、五人の患者たちの夢と性幻想を中心に考察を進めた。そして女性についての両義的観念や不感症、神話的志向などの特徴について指摘した。従来こうした特徴は主として母子関係に着目する精神分析的見地から説明がなされてきた。しかし、それだけではインド人の幼児性や神秘性を確認するにとどまり、結果として乳ばなれしない、保護を必要とする「女性的な」インドという、かつての植民地支配を正当化するオリエンタリズムの言説の一翼を担うことになる。

最後に確認しておきたいのは、本論では精神分析的な説明にたいして批判的検討を加えたが、それはそのまま精神分析学の否定を意味するのではない、ということである。多元的な〈性Ⅱ生〉の記述の可能性を探るといふ本論の問題意識に照らしてみると、精神分析学を否定的に評価するわけにはいかない。⁽¹³⁾さらにインドの精神分析は、西欧的価値観を無批判に継承しているわけではなく、患者たちとの接触を通じてインド固有の発展を遂げた。一九二九年四月一日にインドの精神分析の創設者、ボース（G. Bose）博士は、エディプス・コンプレックスがインド人の患者には不鮮明であるという手紙をフロイトに送っている。⁽¹⁴⁾

今後は、フーコーが『性の歴史』で呈示しているような性科学と権力との関係に関する視点から、インドの精神分析の性格を論議する必要があると思われる。その意味で本論は、インドという文脈において精神分析をメタ次元で考察しようとする試みの、これからも続くであろう長い対話の序章として位置づけたい。

謝辞

なによりも貴重な資料を提供していただいたボンベイの精神分析家の方々、および紹介の労をとってくださったK・S氏に感謝する。

注

- (1) 田中雅一「ヒンドウーの神々——その体系的記述をめぐって」谷泰編『文化を読む——フィールドとテキストのあいだ』人文書院、一九九一、七八—一二四頁参照。
- (2) インドの精神分析の歴史およびその特徴について、Roland, A., 1985, *Psycho-analysis in India*. In P. Gaeffke and D. A. Utz (eds.), *Science and Technology in South Asia*. Department of South Asia Regional Studies, pp. 95-117を参照。
- (3) しかし、一説には一度の診療で七〇ルピー(約四〇〇円)という話もあるから、インドの基準ではけつして安いものとはいえない。
- (4) クリシュナ神話について、O'Flaherty, W.D., 1975, *Hindu Myths*. Penguin, pp. 214-221を参照。
- (5) Kakar, S., 1981, *The Inner World: A Psycho-analytic Study of Childhood and Society in India* (revised and enlarged). Oxford University Press, pp. 79-110. 邦訳 Nandy, A., 1976, *Woman versus Womanliness: An Essay in Speculative Psychology*. In B.R. Nanda (ed.), *Indian Women: from Purdah to Modernity*. Radiant, pp. 146-160. Obeyesekere, G., 1984, *The Cult of the Goddess Pattini*. The University of Chicago Press, pp. 427-450をも参照。
- (6) 心理学的見地からみた女性のライフサイクルについては、Kakar, 1981, pp. 60-63, pp. 68-69参照。

- (7) Baumeister, R., 1988, Masochism as Escape from Self. *Journal of Sex Research* 25 (1) : 28-59. ※の原因を母と娘との関係における「お母さん」の理想との契機を随々 Benjamin, J., 1980, The Bonds of Love: Rational Violence and Erotic Domination. *Feminist Studies* 6 : 144-174 など参照。
- (8) 河野貴代美『性幻想——ミックスの中の戦場』新潮書房、一九九〇、一七〇頁。
- (9) Roland, A., 1987, *In Search of Self in India and Japan: Toward a Cross-Cultural Psychology*. Princeton University Press, pp. 253-254, 297-299.
- (10) ノン・ダス Das, V., 1986, Gender Studies, Cross-Cultural Comparison and the Colonial Organization of Knowledge. *Berkshire Review* 21 : 58-76. Inden, R., 1986, Orientalist Construction of India. *Modern Asian Studies* 20.1-46, 44-45 回轉 1990, *Imagining India*. Basil Blackwell, pp. 86-88, p. 123 参照。45 一般に「難題」の「回轉」Birken, L., 1988, *Consuming Desire: Sexual Science and the Emergence of Culture of Abundance 1871-1914*. Cornell University Press, p. 78, pp. 85-86. 田・中・カペール『「ナニハナニズ」板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社、一九八六、一九五、一一三頁『ナニハナニズ』板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社、一九八六、一九五、一一三頁』の「Radha」 of 1906. *Signs* 17 (1) : 28-49. Moors, Annelies, 1991, Women and the Orient: A Note on Difference. In L. Nencel and P. Pels (eds.), *Constructing Knowledge: Authority and Critique in Social Science*. Sage, pp. 114-122. Stoler, A.L., 1991, Carnal Knowledge and Imperial Power: Gender, Race, and Morality in Colonial Asia. In M. di Leonardo (ed.), *Gender at the Crossroads of Knowledge: Feminist Anthropology in the Postmodern Era*. University of California Press, pp. 51-101. Vance, C., 1980, Gender Systems, Ideology, and Sex Research: An Anthropological Analysis. *Feminist Studies* 6 : 129-143 参照。
- (11) ノン・ダス Das, V., 1987, *The Myth of Women's Masochism*. 田・中・カペール Metuen. Das, V., 1987, On Female Body and Sexuality. *Contributions to Indian Sociology* (n.s.) 21 (1) : 57-66 参照。

(12) Das, 1986, pp. 72-74.

(13) この点についてはミシェル・フーコーによる精神分析の評価、M・フーコー『言葉と物——人文科学の考古学』渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、一九七四、三九五—三九八頁、同『性の歴史——知への意志』渡辺守章訳、新潮社、一九八六、一五—一五二頁、Foucault, M., 1980, *Power/Knowledge: Selected Interviews and Other Writings 1972-1977*. The Harvester Press, p. 219 以下を参照。
Foucault and the History of Psychoanalysis. *History of Science* 18 : 286-302 を参照。

(14) Bose, G., 1956, Correspondence Regarding Psychoanalysis (contd.) : Letter from Dr. G. Bose to Professor S. Freud. *Samkṣa : Journal of the Indian Psychoanalytical Society* 10 (3) : 155-160.